

外国人のみた日本 日本での忘れられない体験（カルチャー・ショック）

著者	Jonar Bade Merla, 梶山 貴史[訳]
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	138
ページ	60-60
発行年	2007-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005292

カルチャー・ショック

外国人のみた日本



Jonar Bade Merla
出身地：フィリピン・バリンガサグ
所属：商工省第10支部
日本滞在：2006年9月～2007年3月

日本での忘れられない体験

ジョナー・バディ・メルラ

カルチャー・ショックは精神的な障害と定義され、異なる文化のなかで生活するときに多くの人が経験するものである。それはまた、自分自身の文化が否定されてしまうときに感じることもある。

程度の差はあれ、外国人であればカルチャー・ショックを経験する。私の場合、成田空港で飛行機から降り立ったときに経験した。全く異なった言語、気温、複雑な交通システムなど、周囲のあらゆるものが私にとって新しく、畏敬の念さえ感じられた。空港内でトイレを探していたとき、その場所を誰かに聞くことは大変であった。私が出会った殆どの空港係員の方々は英語を理解できなかったため、その日はついていかなかったのかもしれない。だが、案内板の表示が理解できたため、トイレを何とか見つけることができた。そうでなければ、私の人生で最もはずかしいことが、この日本の空港で起こってしまっただろう。

日本での滞在では、ここに住む人たちと話す機会が得られると思う。英語を話す人々を多く見つけられても、意思疎通の方法は異なってしまうことがあるかもしれない。意図すること、時には言葉では表されないことに注意しながら、相手の言葉を傾聴する忍耐も必要となる。(ジェスチャー、

顔の表情、動作、視線、声の抑揚といった) 身振り言語を理解できれば、意思疎通が可能ではないかと思ったことがある。だが、それだけではうまくいかないこともある。誤解によって別の方向の電車に乗ってしまった海外研修生がいたことを、私は耳にしたことがあるからだ。だから基本的な日本語は学習し、この国を旅行するときには地図を必ず携帯したい。

食べ物についていえば、和食の味は素晴らしい。「おいしいです!」。千葉市のあるレストランに行ったときに、次の体験をした。箸の使い方が難しいのは別として、好きな食べ物を頼むことが大変だった。メニューに記載された内容を理解するのに時間がかかったため、とても空腹になった。だが、日本語の先生に教えてもらった「これは、いくらですか?」という言葉のおかげで、どうにか好きな食べ物にありつけた。数カ月前に床屋に行ったときのこと。その店のシステムを知らず順番待ちの椅子に座り、順番が来るのを待っていた。私の前には既に客がいた。理髪師は「いらつしやいませ!」と私に挨拶をしたが、意味が全く分からず、順番が次だと知らせたいのだ、と思っていた。数分後、二人の客が入店し、なんと券売機で券を購入した。残念ながら

私は、その前払い制を理解していなかった。当然、優先順位は券を購入した順番、つまり彼らの方が先になってしまった。

希望の髪型について、外国人は日本語でうまく説明できないことにも注意すべきだ。新しい髪型を隠すため、一カ月間帽子をかぶらなければならないこともある。読者の方はその日の私のヘアスタイルがどうなったのか気になるかも知れない。悪くはないが、お話ししたくはない。だが、その理髪師は今では友人のように親切だ。しかも、私が希望する髪型も熟知している。

外国に滞在し、その文化に馴染んでいく過程に、ある種のパターンがあることに気づく。まず、日本のような国に行くことに興奮する。その国に到着すると、あらゆる物が新鮮に感じられるが、時間が経過するとホームシックにかかり、文化的な相違にさえも混乱してしまう。ところが、いつの間にかこの新しい生活様式に慣れてゆく。

価値観や信念は一致しないこともある。その相違に馴染めば馴染むほど、人とコミユニケーションを図ったり、共感する能力をさらに高められると思う。結果として、自分自身の価値観や、出会う人たちの価値観をも理解できるようになるのではないか。(IDEAS研修生/訳 相山貴史)